

東京製本二世連合会だより

東京の製本業発祥の地はどこ？

神田製和会 会長 石坂善久
(株式会社善新堂)

去る五月二十一日、横田大祐新会長が就任された、東京製本二世連合会の第三十四回定期総会でのことです。お隣の席に京橋支部のストウナンバー・須藤賢太郎氏がおられ、興味深いお話を色々とうかがったのですが、須藤さんのお話の中で、ふと思いついたことを書き留めておこうと思います。

須藤さんのおられる京橋、そしてお隣の日本橋といえは、東京の製本業発祥の地といってもよいところ。どこで、誰が、最初に「製本屋さん」として独立したかはさておき、これは恐らく間違いないところでしょう。手元にある明治四十一年発行の「東京製本同業組合人名録」の発行所は「東京市京橋區南鞘町拾五番地」、名簿も旧京橋区から始まっているのを見ても、京橋がかつての中心地であったことが、察せられようというものです。

ところで、弊社営業所のある神田神保町の近く、学士会館の敷地内には、「日本野球発祥の地の碑」があります。明治五年、東大の前

身である開成学校があつたことで、米人教師が学生たちに野球を教えたことが、我が国における野球の始まりであることから、この碑が建てられたそうです。

スポーツにほとんど関心のない私ですが、ボールを握った右手のブロンズ像を中心にした、立派な碑を眺めて、「発祥の地、ものごとの源流がピンポイントでわかっているのって、本当に素晴らしいことだなあ」と、若干のうらやましさも交えながら、しみじみ思つたことではありました。半官で記録がしっかりしている学校と、民間で当時はいかなれば職人の世界であつた製本業をくらべるのは、もとより無理な話であります。それでも、自分の業種のそもそものが曖昧模糊としているのは、何となくもどかしい気持ちになつてしまふあたり、ないものねだりというか、性格なのかもしれません。

です。先にも触れたように、どこで、誰が、最初に「製本屋さん」として独立したかがわからなければ、碑の建てようもないものの、「日本野球発祥の地の碑」を前にして湧き上がった、自分の正直な気持ちではありました。

本作りのすべてを自家でまかっていた初期の版元から、印刷製本部門が独立して外注化した流れはよく知られています。斯界不朽の名著である「書窓 製本之輯」の著者・上田徳三郎翁も、明治十八年、最初に入った年季泰公先が芝神明前の版元の製本部で、十年務めて年季明けに働いたのが、銀座の製本所とありました。

このあたり、わずかに残つた記録から想像するしかない現状ですが、記念碑建立は大げさにしても、恐らく明治時代に店を構えた、「最初の製本屋さん」がどなただったのか、非常に気になつている今日ごろなのであります。ご存知の方、ぜひご教示くだされば幸いです。